

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 29 日現在

機関番号：10102  
研究種目：若手研究(B)  
研究期間：2011～2013  
課題番号：23720007  
研究課題名(和文) 現代新儒家と京都学派を中心とした東アジア現代哲学比較研究

研究課題名(英文) Comparative East Asian Philosophy

研究代表者

朝倉 友海 (Asakura, Tomomi)

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：30572226

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円、(間接経費) 990,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の推進により、京都学派と現代新儒家への比較哲学的アプローチの有効性は、これまで互いに無関係に研究されることが多かった東アジア哲学の両学派への適切な研究方法として広く認識されるようになった。また、比較哲学的アプローチの確立を目指した本研究は、両者に共通する思想の核心が東アジア仏教における円教の理念と結びついていることに着目し、これに基づく独自の形而上学的構成を指摘するとともに、この共通思想の明確化によって、両学派が互いに相補的な関係にあることを示した。

研究成果の概要(英文)：The comparative approach to the Kyoto School and contemporary New Confucianism is now widely recognized as an effective study method to the two East Asian schools of philosophy, which have been hitherto studied separately. This research project attempts to establish the comparative study of these two schools, by clarifying the common philosophical influence from East Asian Buddhism. Based on the common framework of the onto-topological constitution of metaphysics, Nishida's logic of basho and Mou Zongsan's Buddhistic ontology are seen as the closely inter-related systems of philosophy.

研究分野：哲学・倫理学

科研費の分科・細目：比較哲学

キーワード：哲学 比較哲学 京都学派 現代新儒家 国際情報交流 中国・台湾・アメリカ

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 古代ギリシアに淵源をもつ「哲学」は、近代になると、西洋から東アジアへと導入されたが、特筆すべきことは、この地域では、「哲学」が盛んに研究され始めただけでなく、伝統的な思想(いわゆる三教)との関係が問われ続け、その中から、独自の「哲学」を作ろうとする動きが盛んであったことである。なかでも、とりわけ世界的にその名が知られ、しかも「哲学」への寄与が認知されているものとしては、日本の京都学派と中国語圏における現代新儒家があり、この地域においてその影響が広汎に見られるだけでなく、欧米においてもまた、盛んに研究が進められてきた。

(2) 西田幾多郎をはじめとする日本の京都学派と、熊十力から牟宗三へと受け継がれていった中国語圏における現代新儒家というこれら二つの哲学の学派は、西洋哲学を受け止めることで東アジア地域に成立した哲学であるという点と、欧米でも盛んに研究されているという点に、目立った共通性をもつ。また、西洋哲学との対質という点においても、カント哲学への言及が両者において共通しているだけでなく、同時代思想として現象学を意識していた点にも、大いに共通性をもつことはよく知られている。だが、何と云っても、儒教や仏教といった東アジアの伝統思想を大きな参照軸にするという点において、両者が著しい共通性をもつことは明白である。

(3) それにも関わらず、時代的な制約を受けていた両学派に属する哲学者だけでなく、両学派について研究を進めている今日の研究者たちもまた、たがいに他方を認識することなく、まったく独立に研究を行ってきたというのが実情である。これは日本や中国語圏だけでなく、英語を始めとする海外での研究においても同様である。これは、儒教を看板とする新儒家と、主に仏教と関係をもつ京都学派という違いや、中国語と日本語という使用言語の違いとも関係している。

(4) 中国語圏においては、近年、京都学派哲学を、新儒家を踏まえた上で理解しようとする動きが活発に見られる。それに対し、日本においては、京都学派と新儒家をとともに視野に入れた研究どころか、今日なお、新儒家の紹介したいが、ほとんどなされていない。新儒家の始祖と目される熊十力の主著(『新唯識論』)は中国思想の研究者によって邦訳されているが、新儒家の哲学者として最も重要であるところの牟宗三に至っては、欧米では盛んに研究されているにもかかわらず、わが国ではほとんど紹介すらなされてきていない。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究では、京都学派と新儒家をとともに視野に入れた研究を目指し、そのような研究の基礎を築くことを目指している。

(2) 中国語圏における独自の近現代哲学としての現代新儒家の哲学(とりわけ牟宗三)と、日本の近現代哲学としての京都学派の哲学(西田幾多郎・田辺元・西谷啓治・高山岩男)とを比較研究することにより、伝統思想を背景にもつ東アジア圏の独自の哲学的思索において、どのように欧米の哲学の消化とそれへの反応が行われたか、またどのように「哲学への寄与」が試みられたかを分析・特定し、さらにはそれらを継いでいる次世代の思想家たちの試みを的確に整理し接合する。

(3) 本研究はまた、我が国に新儒家思想を紹介するという目的ももっている。そのために、日本における研究環境においては、新儒家受容のさまたげとなっている研究の垣根を取り払うことを一つの目的とする。日本において新儒家受容が遅れている背景として、中国思想の研究と哲学の研究が有機的につながっていない、という学界状況があるからである。

## 3. 研究の方法

(1) 京都学派と新儒家をとともに視野に入れる研究の基礎を築くという本研究の研究目的を遂行するため、本研究では、主に比較研究を方法として用いる。

(2) 比較研究を行うにあたり、世界中のさまざまな領域の哲学者・思想研究者たちとの交流を通して、情報交換や議論を行うことによって、両学派の研究において単独では解決の難しいものとして問題とされている事柄を特定する。そのような問題を通して、両学派をどのように比較すればよいのかが見えてくるからである。

(3) また、本研究は、西洋哲学と東アジア思想とが交差する領域を研究対象として扱うため、哲学だけでなく東アジア思想の専門家とも積極的な交流を行うことによって、研究の垣根を取り払うことを方法的に進めることによって、遂行される。

## 4. 研究成果

(1) これらの活動を通じて比較研究が進んだ。なかでも、特に重要な成果は、両学派の思想的核にある共通点が発見されたことである。

(2) この共通点は、西田の場所論と牟宗三の仏教的存在論（円教論）において、等しく示されている思考形態である。この思考形態は、両学派がともにカントとハイデガーを焦点とする西洋哲学との対比を通して明らかにしようとしたという歴史的経緯があり、両学派が西洋哲学に対してとる姿勢は、この思考形態に基づくものであることが判明した。

(3) この共通点は、一方で、東アジア思想を背景にもっており、具体的には、東アジア仏教における天台思想にまでさかのぼれる。天台円教の特徴は、牟宗三によっては明確に意識されていたが、京都学派は禅仏教を通して同様の思考形態を受け取っていたと考えられる。高山岩男の教相判釈論もまた、その意味がここに新たに見出され、京都学派哲学の必然的な発展形態として位置づけられることとなった。

(4) 最後に、両学派の比較研究の進展により、両学派の比較研究の意義が広く認められるようになってきたことは、特記されてよい。特に、京都学派の研究者たちのあいだで新儒家、なかでも牟宗三の知名度と、その重要性の認知度が格段に上がったことは、本研究だけに起因するとは言えないにしても、大きな変化である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 7 件)

ASAKURA Tomimi, “Converging East Asian Philosophies: New Confucianism and the Kyoto School,” *Contemporary Philosophy in the Age of Globalization*, Vol. 4, pp. 111-132, University of Tokyo, March 25, 2014. 査読無

朝倉友海、「渦巻きと折り開き：自然哲学の可能性について」、『流砂』第7号、191-205 頁、批評社、2014 年 3 月 16 日 査読有

ASAKURA Tomimi, “On the Principle of Comparative East Asian Philosophy: Nishida Kitarō and Mou Zongsan,”

*National Central University Journal of Humanities*, Vol. 54, pp. 1-25, National Central University, September 25, 2013. 査読有

朝倉友海、「覚をめぐる東アジア哲学：西谷啓治と牟宗三」、『理想』689 号、132-143 頁、理想社、2012 年 10 月 10 日 査読無

朝倉友海、「西田哲学と牟宗三の仏教的存在論」、『藤田正勝編 『善の研究』の百年——世界へ / 世界から』、272-292 頁、京都大学出版会、2011 年 11 月 10 日 査読無

ASAKURA Tomimi, “On Buddhist Ontology: A Comparative Study of Mou Zongsan and Kyoto School Philosophy,” *Philosophy East and West*, Vol.61-4, pp. 647-678, University of Hawaii, October 17, 2011. 査読有

朝倉友海、「ドゥルーズと「人間の死」」、『流砂』第4号、154-172 頁、批評社、2011 年 7 月 31 日 査読有

〔学会発表〕(計 9 件)

ASAKURA Tomimi, “Self and Person in the onto-topo-logical constitution of East Asian Philosophy,” 東亞視域中的「自我」與「個人」國際學術研討會、台湾大学、2013 年 11 月 29 日

ASAKURA Tomimi, “Converging East Asian Philosophies,” *After New Confucianism: Whither Modern Chinese Philosophy?* Australian National University, 2013 年 9 月 7 日

ASAKURA Tomimi, “*Basho* and Perfect Teaching,” *UTCP Asian Philosophy Forum Workshop*、東京大学、2013 年 3 月 23 日

朝倉友海、「合評会：朝倉友海著『概念と個別性』」、『スピノザ協会』、明治大学、2013 年 3 月 16 日

朝倉友海、「東アジア哲学の比較研究をめぐって 京都学派と現代新儒家」、『北海道哲学会・北海道大学哲学会、北海道大学、2012 年 12 月 15 日

朝倉友海、「自然哲学における渦のテー

マ、渦の特徴付け、北海道大学、2012年8月7日

ASAKURA Tomimi, “On the principle of comparative East Asian Philosophy,” 當代儒學國際學術會議：儒學之國際展望、中華民國国立中央大学、2012年9月26日

ASAKURA Tomimi, “Kōyama and the Problem of Doctrinal Taxonomy,” Japanese Philosophy as an Academic Discipline, The Chinese University of Hong Kong, Hong Kong, 2011年12月11日

朝倉友海、「東亜哲学的理念 西田哲学与牟宗三的比較研究」, 日中哲学フォーラム、慶應義塾大学、2011年11月19日

〔図書〕(計 1件)

朝倉友海、『概念と個別性：スピノザ哲学研究』、東信堂、2012年3月10日、302頁。

〔産業財産権〕

なし。

〔その他〕

なし。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

朝倉 友海 (Asakura, Tomomi)  
北海道教育大学・教育学部・准教授  
研究者番号：30572226

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：